

京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

規範性と多元性の歴史的諸相

Canone Newsletter

No.3

2004/03/31

Contents

■研究発表

- 「東大寺二月堂本尊光背図像考
—華嚴教学との接点及び大仏蓮弁との関係を中心に—
- 「西洋古代哲学と現代」
- ・「松島図屏風」と「三十六歌仙図屏風」
—琳派における画題継承のあり方に注目して—
・鎌倉初期肖像彫刻における中国美術の受容

■今後の活動予定

■お知らせ

- 刊行物のご案内

■研究会報告

●研究会

※京都美学美術史学研究会と共催

●開催日時

2003年12月13日(木)

午後4時30分～6時

●場所

京都大学文学部新館第六講義室

●発表題目および発表者

「東大寺二月堂本尊光背図像考—華嚴教学との接点及び大仏蓮弁との関係を中心に」

稲本泰生(奈良国立博物館)

●概要

本発表は、絶対の秘仏として有名な東大寺二月堂本尊、十一面観音立像(大観音)に付属していた銅造光背の図像の意味について、新たな解釈を加えようとするものである。

同光背は乗雲の如来像などを刻した頭光部と、表に千手観音像を中心に諸仏菩薩や種々の眷属、裏に大仏蓮弁としばしば比較される世界図を刻した身光部(現状では裏面の図様は拓本によってのみ知られる)からなり、現状では寛文7年(1667)の火災に際して焼け出された断片が、復元的に配列されている。制作年代については天平勝宝(749-757)末年近くに鑄成のうえ線刻が施された大仏蓮弁よりやや遅れる、天平宝字(757-765)頃とする見解がほぼ定説として流布している(こ

の点に関しては二月堂の創建、東大寺における十一面悔過の始修時期などの諸問題をより詳しく検討して、改めてこれらと整合する解釈を示す必要があるが、少なくとも8世紀第三四半期の様式を示す作例であることは、疑いの余地がない)。見事な線刻技術、身光の表裏全面にわたって展開される壮大な画面の構成、いずれをとっても本光背は、大観音が奈良朝創建期の東大寺を代表する仏像の一つであったことを確認するとともに、複雑な図様のうちに盛られたゆたかな内容は、奈良朝の仏教美術を考えようとする際、実に多様な手がかりを与えてくれる。しかしながら、その意味を包括的・体系的に解説する作業は、今日に至るまで行われていない。

発表者は先に刊行された論考(「東大寺二月堂本尊光背の『千手観音五十二体図』—奈良朝仏教における観音信仰と『華嚴経』入法界品解釈の接点」、科研報告書『日本上代における仏像の荘嚴』奈良国立博物館、2003)において、本光背身光表面の図像に関して、(1)数ある千手観音関係の経軌のうち、『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』(いわゆる『千手経』、永徽～顕慶年間・650～661頃漢訳)を主たる典拠としており、同経に説く観音菩薩の「神変」—大悲心陀羅尼なる陀羅尼の力で千手千眼を具備し、光明を放ち、千仏を化現させる—の瞬間を表現している。(2)千手観音像と、その上方と左右を区画して並列的に配されるほぼ同形同大の五十二体の仏坐像は一連の図

像をなしており、それが『千手経』と『華嚴経』「入法界品」（善財童子が善知識を歴参し、さとりにへの階梯をのぼっていく物語）の内容を複合的に表現している。(3)「千手観音五十二菩薩図」は、善財童子の歴参の過程、すなわちさとりに至るまでの菩薩の修行段階を五十三とする、中国華嚴宗の大成者である法蔵以降の華嚴教学に基づき、礼拝の対象である大観音（観音は善財童子の歴参した善知識の一人）が示す神変によって、出会うべき全ての善知識への歴参の完遂が五十二仏の化現による見仏体験によって達成され、自他が完全なるさと

りに到達するという願望を表現している蓋然性が高い。という新解釈を提示した。

本発表ではこの成果をふまえ、同光背の全体像を、(a)その他のモチーフに込められた意味を解明する。(b)従来の研究において、法蔵に代表される正統的な華嚴教学と抵触する内容を含んでいると考えられがちであった裏面の世界図（及び、類似する内容を含む大仏蓮弁の図像）が、実は華嚴教学の体系と整合するものであることを示すことによって把握し、その東大寺史上、さらには東アジア仏教史上に占める位置を見極めるための手がかりをつかみたい。

●研究会「西洋古代哲学と現代」

●開催日時

2003年12月21日（日）

午後1時30分～5時

●場所

京大会館

●発表題目および発表者

① 提題

「古代哲学は現代的問題にどのような意義をもつのか」

瀬口昌久

(名古屋工業大学大学院工学研究科教授)

研究発表

②「安楽死問題とヒポクラテスの『誓い』」

木原志乃

③「地球にやさしいプラトン」

早瀬篤

④「プラトンのメディア教育論」

西尾浩二

●概要

① 本報告では、まず古代哲学と現代の応用倫理学の関係を考え、プルタルコスに哲学に應用倫理学の原型を見出せることを指摘し、ソクラテスの対話的哲学の復活として應用倫理学を位置づけ、次に古代哲学と現実的問題を関係づける場合の解釈学的問題点を反省したうえで、最後に具体的な実践例としてプラトンの技術論を工学（技術者）倫理に應用した例などを取り上げ、現代的問題を理解する知的源泉としての古代哲学の可能性を考察した。

② ヒポクラテスの『誓い』には、安楽死禁止と見なされる一節がある。そこに

は、身体のピュシスに基づくという原点に医者が立ち返り、医の領分を明確にすべきとする倫理的態度がみられる。この点を踏まえて、現代医療における安楽死問題に対して、『誓い』の倫理観がどのような示唆を持っているかを報告した。

③ 現代の深刻な問題である環境破壊に対する哲学的な解決を探る試みとして近年注目されている環境倫理学における自然の価値の問題を扱う議論を検討しつつ、プラトンが後期思想において類比的な議論を哲学的な課題の中心に据えていたこ

とを明らかにすることによって、現代における環境問題へのプラトンのアプローチを試みた。

④ プラトン『国家』の詩人批判は、詩や悲劇という当時の主流メディアの仕組みと効果を批判的に分析し警鐘を鳴らしたものである。その意味で、近年注目されつつあるメディア教育（メディア・リテラシー）の必要性を西洋思想史上最も早期に唱えたものといえる。その分析は映像メディアが主流の今日でも有意義である。

●研究会

●開催日時

2004年3月1日（月）

午後1時～3時30分

●場所

京都大学文学部新館第六講義室

●発表題目および発表者

①「松島図屏風」と「三十六歌仙図屏風」
—琳派における画題継承のあり方に注目して—

宮崎もも（美学美術史学D1）

②鎌倉初期肖像彫刻における中国美術の受容

根立研介(本学助教授)

●概要

① 去年の9月17日から26日までアメリカに滞在し、ニューヨーク、ボストン、ワシントンの主要な美術館を訪ね、琳派作品

を中心に調査してきた。メトロポリタン美術館では、尾形光琳の「八橋図屏風」や池田弧邨の「三十六歌仙図屏風」、ボストン美術館では光琳の「松島図屏風」、渡辺始興の「農夫図屏風」や酒井抱一の「花魁図」、フリーア・ギャラリーでは俵屋宗達の「松島図屏風」、光琳の「群鶴図屏風」、抱一の「三十六歌仙図屏風」などを見ることができた。現在、画家の違いによって、同一画題の作品がどのように変化するのかについて興味をもっているのだが、今回の調査旅行の中では、宗達・光琳の「松島図屏風」と、抱一・弧邨の「三十六歌仙図屏風」の、二組の同一画題作品を見ることができた。そこで発表では、この「松島」と「三十六歌仙」の二つの画題を通じて、琳派において同一画題がどのように継承されたのか、その特徴について考察した。

血縁関係などを基本とした確固たる流派継承を図らなかつた琳派の画家にとって、同じ画題の作品を描き継ぐことは、自らが

琳派の流れを継ぐ者であることを証明するのに、最も有効な手立ての一つであった。宗達の「松島図屏風」が、宗達周辺や光琳周辺で数多く制作されたのは、華やかな大作であり、他派にあまり似た作例のないこの作品が、宗達の流れを継承したことを誇示するのに相応しい作品であったということが考えられるだろう。しかしモチーフは継承されるものの、その内容にはかなり差異が認められ、作者の違いによって描かれる世界が多様に変化した。「松島図屏風」は、原画となった宗達作品の画題が曖昧だからこそ、より各自の解釈の独創性を許容する琳派の自由さが窺える作例となっていると言える。

「松島図屏風」が宗達や光琳周辺で数多く制作された一方で、抱一やその弟子たちは、光琳の「松島図屏風」を知っていたのにも関わらず、この画題を積極的に受け継がなかった。この画題を陸奥の松島と認識した抱一にとっては、あまり伝統的深みがないように感じたのではないかというのが、現在のところの私の考えである。

「松島図屏風」とは反対に、光琳の「三十六歌仙図屏風」は、抱一ら江戸琳派に繰り返し模写された。この光琳の「三十六歌仙図屏風」は、デフォルメされた形の歌仙たちが笑ったりしかめ面したりした表情を見せるそれまでになかったユーモラスな作品で、江戸後期における三十六歌仙の諧謔的受容の風潮に合うだけでなく、業兼本や琳派の始祖的存在であった光悦の描く三十六歌仙絵からも影響を受けており、伝統的性格も持つものであった。三十六人の歌仙が一同に集まって描かれるという構成の独創性、親近感を感じさせる歌仙の表現など

に見られる時代の風潮に合った流行性、そして大和絵の伝統、琳派の伝統をしっかりと継承している伝統性。この三つの要素を併せ持つ光琳の「三十六歌仙図屏風」は、抱一らにとって、時代の要請に応え、かつ琳派継承をも誇示できる格好の画題であったと考えられる。

② 従来の彫刻史研究では、撰関期に和様彫刻が大成され、その大成者の名を取った定朝様の彫刻様式が平安後期を通じて支配的であったが、平安末期頃に奈良地方から萌芽した新たな新様式が慶派仏師の台頭と共に新しい時代様式となり、鎌倉時代は慶派仏師が仏師界の中心になっていったというように筋立てで語られてきた。さらに言えば、慶派仏師の遺品は、興福寺や東大寺などに卓越した造形性をみせるものが数多く残るが、その一方京都を中心に活躍していた前代以来の院派や円派といったいわゆる京都仏師の遺品は鎌倉時代に入るとその存在を確認することさえかなり困難になってくる。そして、こうした事情もあってか、鎌倉時代の彫刻史、あるいはより正確に言えば鎌倉前期の彫刻史は慶派の彫刻史として語られてきた観もあり、そして彼等の代表的な遺品が奈良に偏在していることともあって、その語りを素直に受け取れば、造仏の中心がまるで奈良にあったかのようにさえ思えてくるのである。

しかしながら、鎌倉彫刻史のその後の展開を考えると、逆に鎌倉前期、ことに鎌倉再興造営事業が進められた鎌倉初期の南都の造仏の場、さらにはそこから生み出され、現在も我々の前に呈示される慶派仏師達の造形こそ、きわめて異様で、また例外的な

ものであったとも言える。ところで、南都の再興造仏の問題を考えると、この場で行われた再興造仏においても造形上の拠るべき規範が存在していたかと思われるが、それは鎌倉前半頃までの京都においてはなおも規範として大きな影響を有していた定朝様ではなく、奈良時代、あるいは平安初期の仏像様式、さらにはその背後にある「唐風」の美術であると思われる。慶派仏師は、それを再解釈して新しい時代様式に造り上げていったのではなかろうか。規範とすべき様式が、かなり時を隔てた時代のものであったことも仏師達の造形上の解釈に幅を許したとも考えられる。あるいは、平安末期から南都周辺で芽生えた新たな様式の胎

動も、こうした規範の問題と関わるかもしれない。

この問題を解く新たな手掛かりとして、本発表では、11世紀後半頃に制作された陝西省陝西省延安市鐘山石窟3号窟の老比丘形像の作風と、13世紀初頭の運慶一門の手になる興福寺北円堂無著・世親像のそれとが一見類似していることに注目したい。西夏国境に近い、北宋辺境の肖像彫刻と、日本の、それも時代が大きく異なる肖像の作風に類似性が何故起こってきたのか。両者の背後にある「唐風」美術の影響といった視点から、少し論じてみたい。

■今後の活動予定

● 講演

David Sedley (ケンブリッジ大学教授)

「プラトン『ゴルギアス』における神話と政治」(Myth and Politics in Plato's *Gorgias*)

日時： 4月13日(火) 14:00~17:00 場所： 京大会館

連絡先： 京都大学大学院文学研究科 西洋古代哲学研究室

mnakahata@lit.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

■お知らせ

● 刊行物のご案内

シンポジウムの報告書を刊行予定です。

- ・ 『ACADEMICA 一学の制度と規範ー』
(2003年10月4日開催)
- ・ 『REMBRANDT AS NORM AND ANTI-NORM : Papers Given at a Colloquium
in Graduate School of Letters, Kyoto University, December 15, 2002』
(2002年12月15日開催)

各シンポジウムの内容につきましては、下記のHPをご参照ください。

<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/canone/gaiyou.html#sympo1>

■お知らせ

Canone ホームページをご訪問ください。ニュース・レターでは紹介しきれない研究会や調査に関する情報を、随時更新しています。これからも、**Canone** をどうぞよろしく願いいたします。

<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/canone/>